

無人の街 撮り続けて

写真集「福島のがた 3・11で止まった町」には、フリーカメラマン、飛田晋秀さん(67)「福島県三春町」の怒りが込められている。ネズミに荒らされた茶の間、洗濯物を干したままの新築家屋、野生化した牛たち……。東京電力福島第一原発の事故で無人となった街を撮り続ける。シャッターを切ったのは約3000回に及ぶ。そのたびに「怒りは増幅します」。

歯科技工士の傍ら、趣味で町の職人を撮影した。物作りに精出す職人が少なくなってきたと感じ、記録に残そうとレンズを向けた。建具屋、和菓子屋など市井の姿を温かいまなざしで切り取った。1999年、「街の息吹」を伝えるそんな写真が評価され「三春の職人」を初出版。写真家に転向した。

2012年1月、知人の一時帰宅に同行して初めて原発周辺の避難区域に入った。「街があつて人がいない。恐怖心を感じました。怒りがこみ上げ、涙が止まりませんでした」。街に息づく職人のほつらつとした姿を見てきたからこそ、人の息吹の消えた街は衝撃だった。真相を伝えるために全国で開いた写真展は66回。約2万3000人が足を運んだ。

最近、もう一つのテーマを見いだした。仮設住宅で暮らしながら、木製品を作る人、食堂を再開した人、ピザ店を開店した人。前向きに、ひたむきに生きる避難者の姿に目が向くという。「新しい場所で、人それぞれの歴史と文化を創ってほしい」。本来の柔和な表情が浮かんだ。

【浅田芳明】



「原発事故を風化させてはならない」と訴える飛田晋秀さん